

宝生流二十世宗家・宝生和英さんにお話を伺いました！

# INTERVIEW by 羽衣つたえ隊



※画像は本学にて行われた特別講演会の様子です

宝生流二十世宗家

ほうしょう かずふさ

宝生 和英さん

演能会「和の会」主宰

宝生会常務理事

石川県能楽文化協会 名誉顧問

裏千家淡交会 東京第一東支部 支部顧問

1986年 室町時代より続く能楽の名門、宝生家に生まれる。

2008年 東京藝術大学音楽学部邦楽科を卒業後、同年4月に宗家を継承。

趣味は映画、写真、スキューバダイビングなど。

(宝生和英オフィシャルウェブサイトより)

2024年1月27日、グランシップ静岡能にて「石橋 赤黒」のシテを好演。

能にはいろいろな人物や神様が登場しますが、お家元が演じる上で得意とされている役柄はありますか？

僕はやっぱり女性の方が得意ですね。それから例えば「弱法師」のような盲目の少年とか、「隅田川」なんかに登場する薄幸の役もよく似合うと言われます。というのも僕は、負の感情にこそ人間の魅力があると思っています。怒りや嫉妬、憎しみ恨みを押さえつけてはいけないと思うんです。そういうものをプラスに転じさせて初めて物事は良い方向に進む。舞台上立つときは演劇のように気持ちを込めて演じるというより、役が感性として演者の身体に憑依するイメージです。僕が持っている人間の負の面への興味が、登場人物の見方や得意な役に繋がっているのかなと思います。

舞台上で負の感情をプラスに変えていくということについて、もう少しお聞かせください。

人を恨む気持ちや劣等感って、つまりは今の自分に満足していないってことだから、悪いことじゃないんです。負の感情があるからこそ、もっと自分を高めて良い方向に変えていきたいと思えるし、今の自分じゃ叶わないから別の戦い方をしないとダメな場合って考えられることができる。負の感情は人間が変わろうとして頑張るときの熱源になりうるから、否定してしまうと成長できないんです。舞台上でも、例えば「葵上」の中で「恨んじやいけないのに恨まなければいけない、なんて嫌な世の中だ」って嘆くシーンがあるんですが、だったら自分自身が変わっていかばもっと違う見え方があるんじゃないかというように、発想の転換の余地を意識していたりします。負のオーラを発散しながら、それを変化させていくイメージですね。

能には五つの流派がありますが、それぞれ特色はあるのでしょうか。また、あるとしたら宝生流の特色は何でしょうか。

もちろん流派によってもあるし、時代によっても変わりますね。宝生流は、謡を重視して「謡の宝生」と呼ばれています。旋律が五流で一番多く、複雑な謡い方ができるといふことで、習得難易度が高いと言われています。また宝生流は人によって謡い方のバリエーションがすごく違います。流派に関係なくその個の芸も結構あると思います。僕の場合で言うと、いろんな謡い方ができるのが強みだと思えます。一つの舞台の中でも、謡によって押し謡と引き謡を使い分けるとか。男性的な役の時には引き謡ですが、女性をやる時には押し謡にして、鼻に通して綺麗に謡います。また地謡の時は副地（ふくじ）。地謡の中のサブ

リーダー）の謡い方に合わせますね。隣の人に合わせるのが得意なんです。

あとは、その日の声の性質や体調や場所で謡の方向性や声の調子を変えるようにしていますね。場所で言うと、屋内の大きい所、小さい所、屋外、ホールとそれぞれで謡の発声の音域が変わってくるので、その場所で最も声を通る音域を見つけて、その音を使うようにしています。

こんな風にいるんな声を出せるようになったのは、五人の先生に習ったことによりです。先生によって言うことが全然違うので苦労もしましたが、その違いを楽しんでもいました。



お家元が能楽師として普段から心がけていることは何ですか。

僕が一番大事にしているのは、フィジカルの維持、自分の肉体能力を高めていくことです。技術はずっと向上できますが、それに対してフィジカルは落ちていきます。この二つがクロスしたところが絶頂期ですから、フィジカルを維持し続けて、技術が高まっていけば良いわけです。そうしたら技術もあるし、その技術の再現もできるというわけです。僕の場合はむしろ若い頃身体が弱かったので、フィジカルは今でも常に上昇しています。

あとは声を出すことも心がけています。練習でぼそぼそとした謡い方に慣れると、本番もぼそぼそしか謡えなくなってしまう。だから、僕はクローゼットに閉じこもって、本番と同じ音量で稽古をするようにしています。

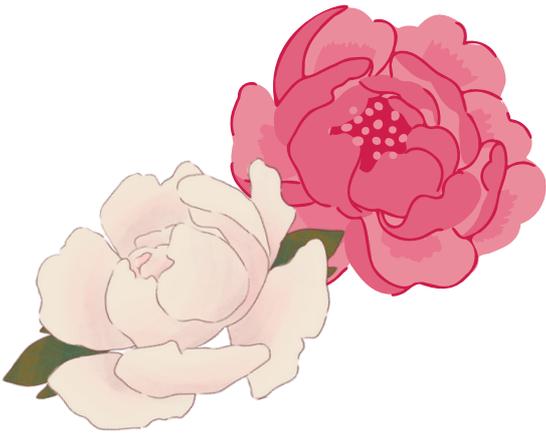
あと、長時間謡うことかな。普通は喉のケアも考えて三十分なのですが、僕は昔、長老の先生から習っていたとき、謡だけで一時間くらい謡わされていました。すると四十分越えたくらいから疲れ始めてきて、楽をしようとするのですが、実はそれが一番力が抜けて良い謡なのです。もちろん体力のあるうちが一番やりやすいとは思いますが、問題は疲れてきてからなんです。そこでも維持できるように長時間、謡の練習をしています。つまりは、常に本番を意識した稽古をしているというわけです。

お家元は能「石橋」に新しい解釈を加えて、「赤黒」という小書（特殊演出）を創作されました。そうした特殊演出を考へたり、新しい演出を取り入れたりする際に大事にしていることはありますか？

「なぜその時代にその曲をやるのか」ということが、ちゃんと定義できるかが重要だと思っています。小書は時代ごとの社会情勢を反映してきてくるものなので、「石橋赤黒」は、疫病禍で様々な対立が起きたことをきっかけに、これを後世への教訓として残したいという思いで作りました。

また、新しい演出を取り入れるときには、「能楽でなければできないもの、能楽である必要があるもの」をやりたいと思っています。

映像と能を掛け合わせた演出を手掛けたこともあります。能の詞章をスクリーンに映し出したり、映像に色をつけずにモノクロで表現したりと、能の文体が主役になるように工夫しました。また、東京スカイツリー開業五周年の企画で映像とミックスした舞台を演出した際には、あえて空間を広く使わず、一定の間だけを異空間のようにしたうえで役者の体の動きを見せるなど、能の持つ特徴を生かすことを心がけました。



改めて、能の魅力はどこなところにあるとお考えですか？

能をやるとき、観るときに、僕自身が一番好きなのは、想像力に制限をかけなくてもいいところなんです。僕は天邪鬼な人間なので（笑）、能を観るときにはあまりコッテコテの、いわゆる「昔の日本像」を想像しないんですね。

たとえば、「杜若」と映画の『冷静と情熱のあいだ』

（2001年）は空気感がとても似ているなと思っています。だから、「杜若」を演じているとフィレンツェやミラノの街並みが頭の中に浮かんできて、遠くからEnyaの歌が流れてくる。

情熱的な愛の物語みたいなイメージが湧いてくるんですね。また、「猩々乱」という曲をやるときには、僕の中に三線が響いてきて心が沖繩に飛んでいたり、「邯鄲」のような中国

ものをやるときにはイスラムのモスクにいるような気持ちになったりします。昔から物事を想像するのが好きで、それが壮大であればあるほど、また全く違うもの同士が結びつく時ほど、楽しくなってきました（笑）

なんだか意外で面白いです！能というところ「かしこまって観なければ」という気持ちになります。自由なイメージを膨らませながら観るといって楽しみ方があるんですね。

若者に向けて、能の楽しみ方、受け取り方のアドバイスをお願いします！

能楽って、自分の中で想像する部分が多い分、失敗の経験が多いほど刺さってくると思うんです。だから、若いうちは面白く見ることができなくても気に病むことはないんじゃないかなと。演じている能楽師も、役と歳が近くなってきたときに役が持つ負の思いが分かってきたりするので、皆さんにも、役の感情やそこからわかる人間の魅力を徐々に感じていってもらえたいかなと思います。

また、能楽は流れる時間がゆっくりなのが良いところだと思っています。だから能を観ると焦らなくなる。今のテンポの速いエンターテインメントだと、「限られた時間で理解しなきゃ」という先入観があるから、追われるような気持ちになりがちですね。

でも、能は長く時間を使える分、その中で色々と思考できるし、自分のことを考える時間にもなります。

なるほど、ゆったりと流れる時間そのものを味わえるのも能の魅力なんですね！

＼ 貴重なお話をありがとうございました！ /



## 羽衣つたえ隊

静岡市清水区三保松原を舞台とする能「羽衣」の魅力を広く国内外に伝える活動をしています。2015年5月の結成以来、活動理念に「物語で人と人をつなぐ」を掲げ、小学校や公民館、老人ホーム、観光施設等様々な場所でオリジナル絵本「羽衣」の読み聞かせを行ってきました。また近年はこれまでの実績が認められ、能公演のパンフレット作りや音楽劇「羽衣」の公演など、読み聞かせ以外にも様々なことに取り組ませていただいています。

〈お問い合わせ先〉

羽衣つたえ隊顧問・静岡県立大学国際関係学部准教授

鈴木さやか

鈴木研究室 054 (264) 5351

E-mail: iwakura@u-shizuoka-ken.ac.jp

取材日：2023年11月22日

取材：影山友海、中田麻結、村松音佳、劉 芷昕

編集：中田麻結、村松音佳